

の古文明等の文あり。第五篇には「支那及朝鮮古代の美術と佛教」として支那六朝、初唐の美術(佛像、摩崖像の造建)並びに吳越王錢徹造金漆塔の考證等を收め、第六篇以下は主として日本に關するものにして「飛鳥寧樂時代の美術と佛教」の篇の中には、六朝三韓の佛教文化を説き、飛鳥奈良兩期佛教の系統及美術の論あり。又奈良朝に於ける密教、秘密儀軌の將來、法隆寺壁畫の四方佛の考證、十一面、千手觀音等の尊信等の記事を有せり。第七篇は長谷寺藏千佛多寶塔銅版の考證にして往年喜田博士と論争を惹き起したるもの、其他靈山淨土變考を附せり。第八篇は東大寺研究にして其の草創考亦喜田博士と辯難ありしものなり。第九篇は「平安藤原時代以後の美術と佛教」第十篇は「日本淨土教美術小史」にして前者には入唐八家の請來秘密圖像、圓仁、宗觀請來の胎藏大曼荼羅の研究、善財童子偷卷攷、後者にては奈良朝以前の淨土變相、源信及其以後の淨土教と美術等の有益なる文字あり。挿畫又諸種の圖像を精選したり。(佛書研究会發行、價五、〇〇)〔西田〕

●興國の偉人新井白石 文學博士 上田萬年著

湯島天神祠の香月庵下に移居して梅樹を植ふ、管公に私淑する所ありし白石の評傳にして「青年時代の苦學」「池中の蛟龍」の二章に於ては、明曆三年二月十日朝展の刻、土屋民部少輔利直の假邸に生

れたる白石が、如何に家庭・祖先の感化を受けしかより説き起し、元祿六年冬、偶然にも甲府宰相徳川綱登に仕ふるに至りしまでの經過を述べ「梅咲く天爵堂」の章に於て甲府藩出仕の事情より六代將軍家宣就職に至るまでを叙し、藩翰譜と本朝武林傳との關係に就ては國語にて書かれたる前者は、漢文を以て書かれたる後者の改訂なりとの説は妥當なる批評ならずと斷じ、「禮樂徵榘の上洛」に於て、禮文園の建設を志せる白石の理想及其上洛を記して國書復號論に對する林家との辯難に及び「日出の國・遼大臣」に於ては主として朝鮮國聘禮使來朝の事を述べ、復號事件に關しては、白石が如何に和漢の書を擧げ、百萬の言を費して縱横に論破するとも君臣の分、明かなる我國に於ては、國王の稱は絶對に神聖にして之を幕府に附與せんませしは僭越と言ふべく、明かに彼の失政なりと難じ「四面楚歌の聲」は白石の運命傾き初めしことより悲愴なりと彼の政治的生涯の末路を語り「閑居の著作」「燔書の慘火」等の兩章以後に於ては閑居以來の著述を擧げ、最後の二章「千駄ヶ谷の月影」「人空し黃鶴樓」は、一世の大政治家の晩年の孤獨と悲境とを描きて筆を擱く。三百卅餘頁の三五版にして隨所に數葉の寫眞を挿む。全編や通俗的に書かれたるが、孔穎達を「こうゐいたつ」とし(一三三頁)職原抄を「しきげんせう」國大曆を「ふんだいれき」

一七七頁)としたる等の俯訓は聊か目障りなり。(廣文堂發行、價一・二〇〇〔中村〕)

●Mc. Laren. A Political History of Japan during the Meiji Era. 1867-1912. London. 1916

本書は嘗て慶應義塾大學の政治學の教授たりしマック・ラーレン氏の著はすところにして、慶應三年より明治四十五年に至る間を主とし、我國政治の變遷を述べ、政界の事情と政黨の消長を明らかにせんと試みたるものなり。蓋し著者は日本が日露戦後の滿韓の經營、歐洲大戰亂に際し協約側加盟と青島の攻略、並びに其後引續き行はれし不可思議なる對支交渉等に於て歐米外交界の疑惑を買ふこと多きを見、此處に本書を著はして我國内の事情、殊に元老、軍人政治家の跋扈及び其外交方針、並びに國民的野心の由來を叙し以て日本の政治と政策との意味を正しく判斷するの料に資せんとしたるものにして、近時日本が其内治外交共に無定見の行動多きを加ふを憂ひて、日本國民に忠告するところあらんとすると同時に、其救済策は只懸つて偏狹なる愛國心を抑制するにありとする著者の宿論を吐露したるところ本書記述の主眼たる如し。

本書第一編を改革時代とし、第二編を議會政治時代とす。第一編に於ては、其初めに明治維新の由來を叙し、王政復古の大業は二

個の異なる思想によりて導かれ来りしものにして、一は保守派の復古思想、一は過激派の維新思想なりしが、時局の發展につれて保守派の思想は敗れ、三千萬の國民を有する十九世紀中葉の社會と政治とを、第七世紀の小部族的政治に還元せしむるの不可能なること周知せらるゝに至り、過激派の改革思想は國民を支配し爲めに急激なる變化を生ぜりとし、又維新以前の武家政治の性質を了解する爲めに特に親切なる歴史的事實をなし、天皇と征夷將軍との關係の起原を尋れ、大化改新時代の社會狀態等を論じ、鎌倉室町、江戸幕府の對朝廷關係を詳述し、歐人渡來後の時代の記事には歐人の天皇將軍に關する觀察等を引用して此の特殊なる朝幕の關係の了解を容易ならしむることに努め、而して討幕に於ける薩長藩の功勞より元老並に軍人政治家の發生事情を明らかにせり。

第二編議會政治時代は明治二十三年の議會開設より大正二年に至るまでの内閣、議會、政黨の事情を記せるものなり。其中には已に明治十八年の天津條約が國民より外交軟の攻撃を受け、國民的野心を満足せしめざりしことより日清戰爭の由來、軍國主義、軍閥政治の勃興、日露戰爭に於ける日本の武勳を説き、戦後亞細亞大陸に於ける日本の經營を叙し、日本の野心、増大權烈となれる徑道を明らかにし、明治末年及日本の政治組織の章に於て元老と軍閥との關係及之れと民主的思潮との消長を説き、軍人政治